

# 文体論再考

宮 内 弘

## 1

文体ほど恣意的にとらえられ、定義のしにくい概念も数少ないと思われるが、ここでは便宜上文学作品のことばに限定して考察を進めていきたい。

かつて文体は、文学や文法を論じる際、ことのついでに触れられることもあった程度で、それ自体、正面きって研究の対象となることはほとんどなかったといつてよかろう。たとえあったとしても、それはレトリックと結びつけられ、多分に実用的で規範的な色彩が濃いものであった。このように文体が学問として正当に扱われなかった理由として、その裏に文体は単なる装飾であつて、文学や文法の本質には関わりないといった偏見が潜んでいたことを見逃すわけにはいかない。もう一つ、文体は文学と語学の境界線上にあり、しかもとらえ所のない厄介なものだけにどちらの側からも敬遠されていたこともその原因であつたであろう。とりわけソシュール (Ferdinand de Saussure) 以後、言語学は philology と袂をわちち、ますます科学的色彩を濃くした結果、以前にもまして言語学と文学の壁は厚いものとなつた。この状態をエンクヴィスト (N. E. Enkvist) はアルプスに<sup>①</sup>、ファウラー (Roger Fowler) はベルリンの壁<sup>②</sup>に譬えている。

ところが文学批評の分野で新批評がでてきたり、フランスで *explication de*

texte といった方法が唱えられると、文学の言語が脚光をあびるようになり、だんだん文体が文学の本質の一部を荷なうものだと考える人がふえてきた。一方言語学の分野でも、言語学が言語をとり扱う以上、文学の言語をもその研究対象に含めることは当然であるという考えの上にならば文体を言語学の一環としてとり上げる学者もかなりでてくるようになった<sup>⑧</sup>。しかしながら文体をこのようにどちらかの側に帰属させてとり扱う限り、文体の本質に迫ることはなかなかむつかしい。文学の一部門としての文体論は、確固とした方法論を持たず、批評家の独断によってゆがめられる危険性を常に有しており、学問としての厳密さをもちあわせていない。一方言語学の一部門としての文体論は文学の芸術性を説明することができない弱点をもっている。

そこで文体論を文学、言語学のどちらか一方に付随したものではなく、自律的なものとして確立することが急務となったのも当然のことであった。このような自律的な文体論をうちたてるには、文学と言語学との間に橋渡しをするという仕事がどうしても必要になるが、この仕事は一般に考えられている以上に困難なものである。それは言語学と文学とでは学問の性格が全く反対であるからである。つまり文学では個々の作品の具体的な細部に関心が向かうが、言語学は個々の事例を説明するために抽象的な理論化に向かう傾向がある。また文学は評価、美的価値を伴うもので、読者の反応・評価がその基盤になっていると言っても過言ではない。しかも読者の主体性が常に重要性を帯びるため、読む人によって反応が異なってくるのも当然といえよう。一方言語学には価値、評価という概念は通常存在しない。言語学者の仕事は、あくまで科学的、客観的にデータを分析し、それを理論化することにある。このように二つの分野は対立する性質を有していて簡単には融合しない。しかしながら、今述べた困難な点をあまりに対立的、二者択一的にとらえて、自律的な文体論は不可能だといってあきらめてしまう必要もないと思われる。弱点を最小限に食い止める工夫を施し、限界をわきまえれば、一応の客観性と文学的洞察をもった文体論を

つくり出すことは可能であるはずである。そうすることによって、これまで見落されていたことばと文学との微妙な関係を少しでも明らかにすることができるのではあるまいか。

## 2

次に文体をどうとらえるかということについて少し考察してみよう。これまでにいろいろな人が文体をさまざまに定義づけてきたが、これらのものは大まかについて、「規範からの逸脱」と「作者の選択」という二つの考え方に集約できると思う。

まず前者はかなり早い時期から提唱されてきた考え方で現在でも幅広い支持を受けている。とりわけ個々の作家の文体を考えるにあたって、それが規範からどのくらいずれているかを調べることによって、他の作家の作品から区別し、特徴づけることができる点できわめて有益である。これは文体をパロールの言語学と定義する考え方にも相通じるものがある。文体（つまりパロールの言語学）は、文法（つまりラングの言語学）からどのくらい逸脱しているかを調べることに他ならないからである。またプラグ学派が提唱した「前景」(foregrounding)<sup>④</sup> という概念とも一致するように思われる。ところで逸脱は数量的なものと、質的なものとの二種類があることを忘れてはならない。数量的な逸脱は統計を用いることによって処理できるが、質的な逸脱となると内容との関係が重要になってきて簡単に見きわめられない。また「規範からの逸脱」という考え方では、規準を何にとるかということが大きな問題になってくる。例えば規準を日常言語とすると、日常言語は規準からいくらかずれている談話(discourse)の集積にすぎず、規準になりえない。同時代の同じジャンルに属する作品をとっても規準には曖昧すぎるであろう。文法を規範にするにしてもそれが逸脱しているものとそうでないものとを厳密に区別できない以上、曖昧さは依然として残る。このように曖昧な形のものにしか規準を求めざるをえな

いのは、「規範からの逸脱」という考え方の弱点である。もう一つの大きな欠陥はハリディ (M. A. K. Halliday) が指摘しているように、言語パターンが規範から逸脱していなくても文体に関与していることもありうるという事実である。<sup>⑤</sup> ほとんど逸脱だと感じられることのない、ありふれた言語パターンも文体的に大変重要な役割を果たす場合が多いこともありうるのである。このことは後で詳しく述べるつもりである。

「規範からの逸脱」という考え方は読者の側からの反応という観点とも結びつく。後述するスピッツァー (Leo Spitzer) やリファテール (Michael Riffaterre) の例からも明らかなように、この方法は逸脱と感じられる言語事象のみをとりあげ、それをもとに作家の内面に迫っていくものである。作者という我々からは直接把握できにくいものを読者の側からの観点にかえてアプローチできるのはこの方法の大きな強みでもあろう。

次にこれとは異なる立場、つまり作者の側から文体を把えることもできる。この立場では、文体を「作者の選択」とみなす。作家は音声から統語法、単語に至るまですべてのレベルにおいて、同義的な表現の中から一つを選ぶことができる。もっとも選択といっても二種類の選択があり、一つは文法的事項に見られるように選択の幅が狭いものと、単語に見られるように選択の幅が広いものがある。作家がこのような中からどのような型の選択をしたかを調べることによって、その作家の文体を研究していくことが可能になるであろう。先の規範からの逸脱に基づいたアプローチでは、読者の反応に刺激を与えた言語事象を拾い出してきたが、このアプローチでは地の文として目立たない文をもすべて文体现象の対象としてとりあげることもできるのである。例えばオーマン (Richard Ohmann) は数人の作家から抜粋した passage の「文」全部を変形文法の観点から分析し、作者の選択の好みのある種の変形操作と関連づけている。<sup>⑥</sup>

## 3

次に具体的に文体研究者の理論と実践を見ながら問題点を考察する。ここで主としてとりあげるのはスピッツァー、リファテール、ロンドン学派のハリディ、ハッサン (Ruqaiya Hasan) などである。

近代文体論を確立し、その後の文体研究に最も大きな影響力をもった人はいうまでもなくスピッツァーであった。彼は驚嘆すべき語学力と豊かな感性を利用して、文体に関して数々の秀れた業績を残したことは周知の通りである。彼の基本的な考え方はクロッチェ (Benedetto Croce)、フォスラー (Karl Vossler) にかなり近いもので、「それぞれの作家の特徴ある文体は、作家の心理や精神を反映している」というものであった。<sup>⑦</sup> スピッツァーの文体研究の方法は文献学的円環法 (philological circle) と呼ばれた。彼は作品を、飽和状態に至るまで何度も読んでその中に浸りきる。その過程で普通の使用法からはずれている表現を寄せ集め、それを基にして、作者の心理を知る上で重要な手掛かりをつかもうとする。一度作品のことばと作者の心理との関係がうちたてられると、これを検証するために、またもう一度作品に立ち返る。このような過程を繰返しながら、表面の言語的な現象から内部の核心に迫っていくのである。彼は単なる外面的データで満足することは決してなかった。彼の文体論は現在見てもきわめて質の高いもので、筆者なども高く評価するものであるが、勿論問題点が全くないわけではない。彼の本の題が「言語学と文学史 (Literary History)」となっていて Literary Criticism となっていないことからもうかがえるように、彼の解釈は言語の分析によって得られたものではなく、既に批評家によってうちたてられたものに基づいているふしがあるようである。従って彼の文体分析は既に言われた説を裏付ける役目を果たしているにすぎないといわれるかもしれない。次に、以前からよく言われていることであるが、彼の方法論では直観が大きな役割を占めていて、へたをすれば、自分に都合の悪い

特徴を無意識のうちに見落としてしまう危険性がある。

その後彼の欠陥を克服すべく、多くの試みがなされてきたが、その中でリファテールは注目に値する理論を発表している。<sup>⑧</sup> 彼は科学的文体論をうちたてることをめざして、方法論をきわめて精緻に組み立てた。彼の方法は、読者の反応を重視し、それに基づいて解釈を施す点で、基本的にはスピッツァーのものによく似ている。彼はまず文体を強調としてとらえる。一般の言語活動は伝達を意図しているが、文学作品の言語はそれだけでなく、作者の態度をも表明していると考えられる。つまり彼のいう文体とは、情報を伝達する際にその意味を変えることなく、付加された美的、表現的強調なのである。この表現的強調としての文体は、読者の反応を通して識別されるが、その識別の手段としてリファテールは予測性という概念を導入する。表現が何らかの形で強調される時には、作者のことばの選択はおのずと慎重になり、他の個所よりも予測しにくい表現になる結果、読者はそこに驚きや刺激を感じるとようになるものである。従って読者が予測性に関して受ける刺激や驚きをたどっていけば文体事象にたどりつくことができる。ここまではスピッツァーの方法とそれほど異なっていない。ところがリファテールは読者の反応が主観性に歪められることを防ぐため、テキストの反応の実例を提供する数人のインフォーマントを設定する。彼はこの読者を原読者と名付け、表層的にしか読めない者と、読み込みすぎる者とかから等距離にある者と規定している。さらに読者（インフォーマント）が文体要素を拾い出す際、読者の反応に独断が入りこむのを防ぐため、内容を考慮することをさげなければならないと警告している。文学作品を別の目的で読む場合、応々にしてその目的によって自己の反応を合理化して、これを自己の関心ある分野に適合させてしまうことがよくあるからである。なお排除した内容は後の解釈の段階で、考慮されることになる。

しかしながらリファテールの説が文体論に貢献したのは、ひとえに次にあげたコンテキストの概念の導入にあったように思われる。<sup>⑨</sup> 予測性の低い要素を

文体事象とする彼の考え方は、広い意味において、文体とは規範からの逸脱であるという定義からさほどかけ離れたものではない。この定義は規範の設定に問題があることは既に述べた通りであるが、リファテールは文脈の概念をもち出すことによってうまくこの問題点を回避したのである。彼によると、文体事象は文法の規範からではなく、周囲の文脈によってうちたてられた規範から逸脱したものであるという。例えば、最上級が異常に多く用いられている文がいくつ続いても、周囲の文脈においてこの現象がごく当たり前ならば、予測性は高まり文体事象とはいえなくなる。最上級はいつも同じ表現価値を有しているのではなく、相対的なもので、コンテキストが変われば、それにつれて表現価値も変わってくる。このように文法というものは、言語事象の機能は見分けられるが、文体に関与するかどうかは見分けられないのである。さらに文体事象は読者に知覚されなければならないし、またそのように言語的に仕組まれたものなのだ。従って文体事象と文法事象は厳密に区別されなければならない。

ところがこれまでの言語学的アプローチを試みた学者は応々にしてこのことを無視してきた。レヴィ＝ストロス (Claude Lévi-Strauss) とヤコブソン (Roman Jakobson) は共同で構造主義の立場からボードレール (C. P. Baudelaire) の『猫』の詩の分析を試みているが、これもその例外ではない。<sup>⑩</sup> リファテールは自分の分析を示しながら、彼らのアプローチは言語学ではあっても文体論ではないときびしく批判している。彼らがやったことは、単なる言語事象を恣意的に選び出しているだけで、詩と読者との間の接点は何も示されておらず、言語学の研究のために、たまたま文学作品という資料を使ったにすぎないというのである。

彼のこの指摘は大変重要で筆者も全く同感であるが、全体的にみると彼の理論が精緻であるだけにそれだけ小さな欠陥も目立つようである。まずデータ提供者 (インフォーマント) を読者とみなすことと、彼らが文体要素を拾い集める際、内容を排除するということに問題がありそうである。彼は科学的という

ことにあまりにもこだわりすぎるため、文学的に重要な点を多く切り捨ててしまふ結果になっている。文学にとって主観や主体は最後の抛り所となるものがあるが、それをインフォーマントにまかすという点がひっかかる。さらにその際、内容を考えないで読むということは、彼の方法では実際不可能に近いことであり、たとえできるとしてもそれは文学を読む行為から程遠いものである。この点ではレヴィ＝ストロスとヤコブソンがおかした誤りとさほど異なっていないであろう。もう一つ、彼は文体事象を、読者が知覚しうるコンテキストからの逸脱としてとらえているが、文体事象は文脈の中に隠れひそんでいて知覚されにくいものの中にも見出されるのではなからうか。

## 4

次にロンドン学派の文体論に移ろう。一口にロンドン学派といっても様々な考え方の人がいて、一派として総括することは困難であるが、一般的にはファース (J. R. Firth) を創始者とする彼の弟子達を総称してこう呼ぶ。その中で文体にも取り組んでいる学者はリーチ (G. N. Leech), スペンサー (John Spencer), グレゴリー (M. J. Gregory), チャップマン (Raymond Chapman), シンクレア (J. M. Sinclair), エプスタイン (E. L. Epstein), ファウラー, ハリディ, ハッサンなどである。

ハリディはロンドン学派で指導的地位を占め、いわゆる Category-Scale Grammar なるものの提唱者として有名である。彼はまた文体にも関心を示し、自分の提唱した文法体系を用いながら、これまでに見られなかった新しい角度から文体にアプローチしてきた。またハッサンとは夫婦ということもあって文体の仕事では共通の考え方も多く見られる。ここは文法を論じる場所ではないので、詳しい説明は控えるが、<sup>⑩</sup> 彼の文法にとって特徴的なことは、彼が言語の機能的側面を重視するという点であろう。彼のこのような機能重視の言語観は、ロンドン学派の祖とされるファースが影響を受けた人類学者マリノフ



スキー (B. K. Malinowski) の考え方を受けついでいることは明らかである。そしてこの言語の機能的側面こそ彼を文体研究にも目を向けさせたものと思われる。そこで彼の考えを簡単に述べておこう。彼によれば、言語は同時にいくつかの機能を果たしているが、これらの機能は、テキスト機能、対人的機能、概念的機能の三つに分類できるという。テキスト機能は状況に適合した、まともあるテキストや言語の内的統一を形成する機能である。対人的機能は話者の態度、評価、また対社会的、対人的関係などを表わし、概念的機能は内容を表わす。彼はさらにそれを、実在の世界像を表わすものと、基本的論理関係を表わすものとに分類している。このような機能の多様性と言語の内的構造は深く関連しているので、ことばがある構造をとることを説明するには、ことばの機能に注目しなければならないのである。こうして言語パターンを、言語の機能に関連づけることによって単なる言語事象を文体事象から区別することが可能になる。換言すれば、文体に関与する言語パターンとそうでないものとの区別は、言語パターンの機能を調べることによって、明らかにしていくことができるのである。

ところで foregrounding とよばれる目立つ言語パターン（ハリディはこれを prominence と呼んでいる）を規範からの逸脱とする考え方が支配的であるが、prominence が多用されて目立たなくなれば反対にそれは規範を形成することにもなる。これに関連して、prominence を見分ける際、応々にして規範からかけ離れた表現のみに関心が向かうが、ごくありふれた規則的な言語パターンにも文体的に重要なものが多く見られることは忘れてはならない。特に伝統的な修辞学では、文体は文彩や目立った言語形態から成っていると考えられてきたため、ありふれた言語事象が文体に関与していることを忘れがちであった。しかしながら不定冠詞一定冠詞や、自動詞一他動詞の対比に見られるような、ありふれた言語事象が文体を形成する隠れた力であり、時にはきわめて大きな文体効果をもつこともまた事実である。このような規則的言語パターン

が prominence を形成しているかどうかを知るには統計の助けを借りなければならぬが、統計はその限界さえわきまされれば、大まかな指標を知る上できわめて有効である。以上のハリディの方法を要約すれば prominence を示す規則的言語パターンを統計などを利用して見つけ出し、それらの言語機能を明らかにすることによって、文体に関与する prominence とそうでないものとを区別していくということになる。彼はさらに言語パターンと作品のテーマとの関連性を追求することが文体論にとって重要であることも力説している。ハリディはこの方法でゴールドディング (William Golding) の『相続者』(*Inheritors*) において、自動詞的表現や無生物主語が多用されている点に着目して、シンタクスと小説のテーマとの関連性を論じている。<sup>⑩</sup>

次にハリディと重複するところも多いが、ハッサンの文体理論を簡単にみておこう。<sup>⑪</sup> 一般に言語学者は、文体論は文学の言語を調べる学問であり、それゆえ文体研究に言語学のモデルからひき出された記述的枠組を用いることができると考える。またグレゴリーとスペンサーは文体論に言語学の枠組を用いる根拠として次のようなことをあげている。「文学はそれ自体閉鎖されたものではなく、一般社会の文化の上に成り立っている。また文学の手段である言語も、社会の文化を伝達する道具であるため、我々が言語の一般的機能との関連で、文学の言語をみることは充分正当化されうるものだ。」<sup>⑫</sup> 一見理論は整然としているようであるが、ハッサンはこの中に大きな問題点が潜んでいることを指摘する。文体論が文学の言語を研究対象にしても、それが文学の言語の特質を十分に考慮しているとはいえない。「文学の言語」を扱うと言いながら、「言語」の方にのみ重点を置き、「文学」の側面を完全に忘れてしまっているのが実状なのである。「文学の」という修飾語は、単に言語についてのデータが見つかる場所を示しているにすぎない。言語学のあらゆるレベルの、あらゆる項目を分析したとしても、これは文学を言語として分析していることに他ならず、芸術としての文学作品の現象は何も説明されてはいないのである。

それでは文学の言語と非文学の言語とは根本的にどのような所が異なっているのでしょうか。まず一般の言語では、言わんとするところのもの、つまり意味内容とその言語化とが直接つながっている場合が多いのに対し、文学の場合は、その間に複雑な象徴化の過程が入りこんでいて両者は直接、結びついていないのである。勿論非文学の言語においても、象徴化はみられるが、伝達の役目を果たすためには、両者の関係はかなり固定したものでなければならない。一方文学作品においては、象徴化は作品・作家に固有なもので、両者の関係は流動的なものである。

ところで文学は昔から意味内容とその言語表現とから成り立っていると考えられてきたが、このような二分法では文学の言語の特徴を明らかにすることはできない。そこでハッサンは文学を形成するものとして次の三つのレベルを設定する。その第一は抽象的な統一原理で、テーマといってもいいようなもの、第二はテーマを象徴化したテキスト内の出来事で、プロットにあたるもの、第三のものはそれらを言語化するものである。重要なことは、これらの三つのレベルの間は象徴化の関係で結ばれている点である。文学の言語を他のものから区別するのは正にこの点なのだ。従って文体論の関心の中心もこれに関連した言語現象におかれなければならない。具体的にいうと、テキストの内部構造を形成するものや、第一のレベル（テーマ）や第二のレベル（プロット）と第三のレベルである言語との関連性についての研究が文体論の中心ということになる。文体論は、テキストの内的統一や作品のテーマを実現するために、言語がいかに機能し、それらと関わり合っているかということを研究するものなのだ。このような考え方からも明らかなように、彼女は文体論から評価を除外すべきでないと考える。科学的文体論という名のもとに、内容や評価を除外することは一見もっともらしく聞こえるが、それは単なる言語データの寄せ集めにすぎない。ちょうどブルームフィールド(Leonard Bloomfield)が意味を言語から除外しようとしてうまくいかなかった事実を想起するがいい。テーマにそ

った動機づけや評価の基盤が与えられた言語データのみが文体的に有意義なのである。

## 5

私がハリディやハッサンに注目したのは、彼らの文体理論だけでなく、二人が初めて文体研究に応用した cohesion という概念のためである。cohesion とは彼らの定義によると、「文」と「文」との間に存在する、意味の結合関係であり、もともとハリディが提唱した三つの機能のうちのテキスト機能（つまりテキストの内部構造）を形成するものとして考案されたものである。つまり cohesion はテキスト中の構造的に無関係な要素に意味の連続性を与え、首尾一貫した意味単位をつくりあげるものなのだ。<sup>⑩</sup> この概念が文体研究にとって重要なのは、一つにはこれが「文」を超えた所の言語現象であるからである。これまで文体の言語分析は「文」内のものに限られていたようであるが、これでは文体を十分に分析できない。また詩と比べて、一般的に分量も多い小説では特に大きな単位の分析が必要になるのでこの cohesion 分析はきわめて有益である。次に一見平凡な言語事象でも文体の観点から見ると重要な機能を果たしている場合が多いことは既にふれた通りであるが、この cohesion 分析においては、目立つ表現だけを拾い出す作業では見落としかねないような平凡な言語要素をも考慮するという長所がある。

それでは cohesion は具体的にどのようにして形成されるのであろうか。表①に示されているように、比較を含む「指示」、「代入」、「省略」、「接続」、「語」によって意味の結合関係が形成される。そのうち最初の四つは grammatical cohesion、あとの一つは lexical cohesion として分類される。この中で一番取り扱にくいのは「語」である。つまりどの単語とどの単語とが関連しているかを識別する際、人によって多少の食い違いがでてくるからである。しかしながらこの誤差は cohesion 分析の価値を減じるほど大きいものではない。

表①

指示

*We went to the opera last night. That was the first outing for months.*

代入

The neighbours grow yellow roses. I could grow red ones.

Shall I call the doctor? Please do so.

省略

They are fine actors. John is the finest I've ever seen.

Can all cats climb trees? They all can.

接続

My client says he does not know this witness. *Further*, he denies ever having seen or spoken to her. (付加)

She failed. *However*, she's tried her best. (反意)

He stayed at home. *For* it was raining hard. (原因)

"Ticket, please!" said the guard. *In a moment* everybody was holding out a ticket. (時)

語

There's a boy climbing that tree.

The { ① boy's  
② lad's going to fall if he doesn't take care.  
③ child's

しかしながらハリディとハッサンの cohesion の枠組をそのまま文体分析にあてはめると若干不都合なことがおこってくることも事実である。cohesion は「文」を超える意味の結合関係であるが、「文」とは恣意的なもので、一つの「文」はコンマやコロン等を使うことによっていくらかも長くなりうる。とりわけ文学作品では長い「文」はさほどめずらしいものではない。従ってそのような文章にハリディ、ハッサンの cohesion 体系を利用して細かい分析はできないであろう。そこで彼らの枠組を「文」から「節」のレベルにまでひき上げて、「文」と「文」との関係は勿論のこと、「文」内の構造をもきめ細く分析

する方がより実際的ではないかと思われる。こうすることによって「節」と「節」の間の結合関係を形成する関係詞のような重要な要素をも cohesion に含めることができ、きめ細い分析が可能になるであろう。

アメリカのガトヴィンスキー (Waldemar Gutwinski) という学者はハリデイ、ハッサンとは若干異なった枠組で cohesion に取組んでいるが、<sup>⑥</sup> 彼の分析は、cohesion を「節」のレベルにまでひき下げたり、新しい概念“enation”や“agnation”を導入している点で、二人のものに比べてより実際的である。“enation”は文の構造の類似性によって cohesion を形成するものである。(例えば As Caesar loved me, I weep for him; as he was fortunate, I rejoice at it; as he was valiant, I honour him:) 一方 agnation はほとんど同じ語いを用いながら、異なった構造をしているものをいう。(He wrote this book. This book was written by him.)

これら三人の cohesion 体系を参考にしながら、私なりに cohesion の要素を整理したものを表②として次に示す。(なお“enation”は並列として扱っているが、“agnation”は lexical cohesion (語) で処理した方が簡略化されるので私はとらない。)

表②

## Grammatical Cohesion

## Reference

Pronominals ... he, she, it, they, ...

Demonstratives ... this, that, these, those, here, there, then, ...

Comparatives ... same, different, other, more, less, ...

## Substitution

Nominal ... one, the same, so, ...

Verbal ... do, be, do the same, do likewise, do it, ...

Clausal ... so, not.

- Ellipsis
  - Nominal
  - Verbal
  - Clausal
- Conjunction
  - Additive ... and, therefore, or, incidentally, ...
  - Adversative ... yet, though, but, however, ...
  - Causal ... then, therefore, for, because, ...
  - Temporal ... when, formerly, before, ...
  - Relative ... which, who, when, where, whom, ...
- Parallelism
- Lexical Cohesion
  - Reiteration
    - Same Item
    - Synonym
    - Superordinate
    - General Item
  - Collocation

この表をもとにして、スウィフト (Jonathan Swift) の『ガリバー旅行記』 (*Gulliver's Travels*), ジョイス (James Joyce) の『ユリシーズ』 (*Ulysses*), ローレンス (D. H. Lawrence) の『虹』 (*The Rainbow*) の cohesion 分析を試みてみよう。理想的にはコンピューターを用いて全部の文を調べるべきであろうが、一部の抜萃でも大よその傾向は充分つかめるものと思う。(テキストとその cohesion 分析は本論文末尾の別表を参照のこと。なお表で×印は表②で示した cohesion の要素を表わし、○は前提、つまり cohesion の要素によって連結されるものを表わす。( ) で囲んだ要素は幾分曖昧な点を含んでいることを示す。またそれぞれ関連するものを実線で結んでいる。)

そこでまずスウィフトをみていこう。(表③④)

彼に関して特徴的なことは接続による cohesion が目立つことであろう。彼

の「文」はふつう何個かの「節」に分かれているが、それらの「節」はほとんど接続詞によって結ばれている。スウィフトの接続詞はまた、「文」の冒頭に使われる率がきわめて高いことも注目しよ。これらの接続詞は「文」と「文」、「節」と「節」との間の論理的関係を明確にする働きを有しているが、必ずしもすべての「文」や「節」は論理的につながっているわけではない。例えば *for* は前の文を受けて原因・理由を述べるのに用いられるが、スウィフトの例では、積極的にそのような意味をもっていないことが多く、単に *cohesion* を示す記号にすぎないこともある。つまり *for* は意味の上からいえば不必要なもので、一種の冗語といえるであろう。これは *but however* や *but yet* など、二つの接続詞を並べて用いる所にも顕著に表われている。スウィフトの接続詞は実際はどうであれ、表面上は形式的に論理が通っているかのように見せかける役を果たしているのである。

また最初の例ではあまり使われていないが、二番目の例では接続詞の他、関係詞が多く使われていることも見のがしてはならない。しかも関係詞は接続詞的性格を有している非制限的用法に限られる点にも注目すべきであろう。このように接続詞や関係詞によって形成された、論理的形式を備えた *cohesion* は我々をある一定の方向に引っばっていく力をもっている。とりわけ『ガリバー旅行記』は架空の国の話であるにもかかわらず、その切れ目のない連続性のために、読者は疑う余裕を充分与えられず、作者の世界に否応なくつり込まれてしまう。これはいってみれば、作者の論理が表面に強烈に押し出された作者誘導型の文体だということができよう。一般に18世紀の小説の中にはスウィフトに限らず、このような傾向を示しているものが他にもかなりみられるようである。

一方これと対照的なのがジョイス(表⑤)やローレンス(表⑥)の文体である。接続による *cohesion* が両者とも非常に少ないことに気づくであろう。(たとえあっても *and* や *then* のようにあまり論理的でないものである)。と



りわけジョイスの方は cohesion の要素がきわ立って少ないことは注目に値する。このことはとりもなおさず、「文」や「節」の連続性が言語によって明確に提示されていない部分が多いことを示している。また指示詞や省略形が曖昧なため、cohesion が形成されないような場合も目につく。(もっともジョイスの『ユリシーズ』はいろいろな文体の寄せ集めであり、他の二人ほど一樣な文体ではないので一般化することは危険であるが、意識の流れ、内的独白などの観点からみると上述した点はかなりの程度彼の特色を表わしていると思われる。) このような cohesion の型は、作者が表面にでないで、文の連結を読者の想像にまかせる効果をもつといえないだろうか。文の運びにしても、読者が想像力を発揮できるように作者ができるだけ後にひきさがっているように思われる。ジョイスの文体はよく意識の流れの手法の観点から論じられるが、これは lexical cohesion に反映されている。抜萃した passage は「死」という概念を核として、それから連想される単語によって一応 cohesion が形成されているが、論理的にみると cohesion が切断されている個所がたくさんある。この空白を、連想や想像でうめることがジョイスの読者の役目であるといえよう。従って彼の文体は読者主導型なのである。イザー (Wolfgang Iser) は、「読みの行為の創造性を保証するのは、テキストの内部の空白のすき間である。それらのすき間こそ読者がテキストに入りこむ入口であり、そこで読者は総合的意味を創造する」<sup>⑩</sup> という主旨のことを述べている。ジョイスの文学は、cohesion とその間隙との緊張の上に成り立っているともいえるであろう。これを作品中の具体例で例示していけば、一つのおもしろい文体論ができあがると思う。

ローレンスに目を移そう。彼における lexical cohesion はジョイスのものと同様、重要な役割を果たしているが、その性質は全く異なっている。ローレンスは key word ともいえる語を何度も繰返して用い、その呪文のような繰返しの過程のうちに、やがてそれらを象徴化してしまう。しかもこれらの単語は代名詞化されることは少なく、あくことなく繰返される。ここにローレンスと

いう作者がかなり強引に顔を出してきていることがうかがえるであろう。読者の連想が働くように、作者が一步引き下がることもあるジョイスの文体とはこの点で異なるようである。また全体的にローレンスの文体は論理的側面が希薄だという印象を受けるが、これは今述べた繰返しの多い lexical cohesion や接続詞、関係詞による cohesion が少ないことにその原因があるようである。

以上の cohesion 分析によってこれら三人の作家の文体の特徴的な一面が明らかになった。ミリック (L. T. Milic) はスウィフトの文体を統計的に考察したが、<sup>10</sup> その結果得られた文体的特徴の多くは cohesion という概念で包括できることから明らかなように、cohesion 分析は使い方によっては大変有益なものである。しかしながらここで注意しなければならないことは、cohesion 分析は客観的で、誰にでもできるという利点をもっている反面、読者の直観を働かせて読むという文学にとって大事な行為が欠けていることである。そこで cohesion 分析で得られたデータを、読むという行為に還元することによって内容との関連を追求する必要がある。換言すれば直観と言語データとをつき合わせながら作品を読んでいかなければならないのではあるまいか。特徴ある言語パターンは内容の裏付けがあって初めて文体事象になるからである。

例えばスウィフトの場合、cohesion と彼の文学の本質である皮肉や諷刺との関係も考えなければならない。彼の文章において観察される論理的 cohesion という標識によって読者はある一定方向に引きずられていくが、そのような表面上の強引な意味とその下に隠されている深層の意味との間にギャップが生じ、そこに皮肉が感じられる場合がある。『控え目なる提言』(*A Modest Proposal*)でも馬鹿馬鹿しい提案が大まじめに取りあげられ、それが cohesion によって強引に押し進められる。こうして提案の馬鹿馬鹿しさと論理的 cohesion の強烈さとの間のギャップによって皮肉の効果が倍化されていくのである。また形成された cohesion の中に異質のものを紛れ込ませて、諷刺を効果的にする技巧も見られる。例えば、作者が承知の上で、明らかに原因、理由にならな

い個所に for を使う場合もそうであろう。また同じ構文を並列することによって cohesion を形成し、その中に諷刺したい異質のものを紛れ込ませて、落差をつくり、諷刺的ユーモアを感じさせる例も数多く見られる。次の例はその好例であろう。

「彼らの書き方というのが実に変わっている。ヨーロッパの人のように左から右へ書くのでもなければ、アラビア人のように、右から左へ書くのでもない。かといって中国人のように上から下へ書くのでもない。英国の婦人のように紙の隅から隅へ、斜めに書くのである。」（「小人国への旅」第6章）

以上みてきたように文体研究にとって大事なことは、特徴的な言語パターンを見出し、それを読む行為の中でとらえ直すことによって内容との関連性を考えていくことではないだろうか。こうすることによって文学の文体研究はより確固とした基盤の上になつていくことができるように思われる。

## 注

本稿は日本英文学会第52回全国大会において「文体論再考—散文の分析を中心として」と題するシンポジウムで発表した原稿に基づいている。

- ① N. E. Enkvist, John Spencer & M. J. Gregory, *Linguistics and Style* (London : Oxford Univ. Press, 1964) p. 3.
- ② Roger Fowler, *Language of Literature* (London : Routledge & Kegan Paul, 1971) p. 2.
- ③ これに関する理論的根拠は、ハッサンの理論を扱う個所において詳しく論じるつもりである。
- ④ “foregrounding” は、P. L. Garvin がそれに相当するチェコ語を英語に翻訳してから盛んに用いられ始めた。詳しくは P. L. Garvin (trans.) *A Prague School Reader on Esthetics, Literary Structure and Style* (Washington, 1958) を参照。なお次の書物にも “foregrounding” について有益な記述がある。  
G. N. Leech, *A Linguistic Guide to English Poetry* (London : Longman, 1969)

## 第4章 (pp. 56—72).

- ⑤ M. A. K. Halliday, “Linguistic Function and Literary Style” in *Literary Style: A Symposium* (ed.) Seymour Chatman (New York: Oxford Univ. Press, 1971) p. 340.
- ⑥ Richard Ohmann, “Generative Grammars & the Concept of Literary Style” in *Linguistics and Literary Style* (ed.) D. C. Freeman (New York: Holt Rinehart Winston, 1970) pp. 258—278.
- ⑦ Leo Spitzer, *Linguistics and Literary History* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1948) pp. 1—40.
- ⑧ Michael Riffaterre, *Essais de Stylistique Structurale* (Paris: Flammarion, 1971).
- ⑨ 彼は「ミクロ文脈」と「マクロ文脈」という二種類の文脈を提唱している。詳しくは Riffaterre pp. 64—94 参照。
- ⑩ Michael Riffaterre, ‘Describing Poetic Structure: Two Approaches to Baudelaire’s “Les Chats”’ in *Essays in Stylistic Analysis* (ed.) Howard S. Babb (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1972) pp. 362—392.

ここでヤコブソンとレヴィ＝ストロスはテキストを自律的な意味体系だと考えているため、一編の詩を他のものから全く切り離して記述している。

- ⑪ ハリディの Category-Scale 文法の骨格だけを述べよう。彼は四つの category, つまり unit, structure, class, system を設定する。これらのうち unit と structure は連鎖・結合関係を, class と system は選択の関係を表わす。unit は morpheme, word, group, clause, sentence から成り, 談話の結合を互に関連づけるものである。structure は主語, 補語, 述語などで unit 内の統辞的關係に関するものである。class は unit の中で互いに交換可能なもので, 名詞, 動詞などの要素を有する。system は, 単数—複数, 受動—能動など structure 内の組織的な関係を表わす。これらの category を互に関連させるものとして三つの scale, つまり rank, delicacy, exponence を導入する。rank は unit を階層的に排列する尺度である。delicacy は記述の詳しさを測る尺度であり, exponence は category をデータに関連させる尺度である。

- ⑫ M. A. K. Halliday, “Linguistic Function and Literary Style” in *Literary Style: A Symposium* (ed.) Seymour Chatman, pp. 330—368.

ゴールディングの小説では, 原始人と彼らよりも進歩した人種が描かれているが, とりわけ原始人のことば使いには際立った特徴が認められる。全体的に無生物主語と

自動詞が結びつくシンタクスが多く、人が主語になる場合にも本来ならば他動詞が使われる所に自動詞が使われている。このシンタクスは、人や物は他のものに働きかけたりせず、自ら行動するという原始人の世界観を表わしている。また彼らにとっては因果関係も存在しないし無生物と動物との区別もない。

以上がハリディの文体分析の要約である。

- ⑬ Ruqaiya Hasan, "The Place of Stylistics in the Study of Verbal Art" in *Style and Text* (ed.) Hakan Ringbom (Stockholm : Sprakförlaget Skriptor, 1975) pp. 49—62.
- ⑭ John Spencer, M. J. Gregory & N. E. Enkvist, *Linguistics and Style*, p. 60.
- ⑮ M. A. K. Halliday & Ruqaiya Hasan, *Cohesion in English* (London : Longman, 1976).
- ⑯ Waldemar Gutwinski, *Cohesion in Literary Texts* (The Hague : Mouton, 1976).
- ⑰ Wolfgang Iser, *The Implied Reader* (The Johns Hopkins Univ. Press, 1974) p. 40.
- ⑱ L. T. Milic, *A Quantitative Approach to the Style of Jonathan Swift* (The Hague : Mouton, 1967).

Swift: *Gulliver's Travels* 表③

表③のテキスト

Jonathan Swift: *Gulliver's Travels*

①Yet, as to myself, I must confess, having never been designed for a courtier,<sup>a</sup> either by my birth or education, / I was so ill a judge of things, /<sup>b</sup> that I could not discover the lenity and favour of this sentence: /<sup>c</sup> but conceived it (perhaps erroneously) rather to be rigorous than gentle. ②I sometimes thought of standing my trial: / for although I could not deny the facts alleged in the several articles, /<sup>d</sup> yet I hoped they would admit of some extenuations. ③But having in my life perused many state-trials, / which I ever observed to terminate /<sup>e</sup> as the judges thought fit to direct: / I durst not rely on so dangerous a decision, in so critical a juncture, and against such powerful enemies. ④Once I was strongly bent upon resistance: / for while I had liberty, /<sup>f</sup> the whole strength of that Empire could hardly subdue me, / and I might easily with stones pelt the metropolis to pieces: /<sup>g</sup> but I soon rejected that project with horror, / by remembering the oath I had made to the Emperor, /<sup>h</sup> the favours I received from him, / and the high title of Nardac he conferred upon me. ⑤Neither had I so soon learned the gratitude of courtiers, to persuade myself / that his Majesty's present severities acquitted me of all past obligations. (A Voyage to Lilliput)

数字は「文」番号を、アルファベットは「節」を表わす。以下のテキストでも同じ。

文番号 節	① a	b	c	d	② a	b	c	③ a	b	c	d	④ a	b	c	d	e	f	g	h	⑤ a	b		
指示			x → x	it		○ → x	they							x	that(Empire)	x	that						
代入																							
省略																							
接続	x → yet	○ → x	○ → x	x → but	○ → x	x → for	○ → x	x → but	○ → x	x → as		○ → x	x → for	○ → x	x → and	○ → x	x → but		○ → x	x → and	○ → x	x → neither that	
関係詞										x	which												
語	x		x	lenity		x	extenuations											x		x	gratitude	x	acquit
			x	favour		x	trial		x	trials								x		x	courtiers	x	
	x																	x		x	majesty	x	
			x	rigorous														x		x	severities	x	
並列																		x	x	x			







